



TORU FUKUHARA RECITAL II

徹の笛

第二回 福原徹演奏会



徹君の笛

二年前、初参加で芸術祭大賞を受賞した徹君が昨年は一ヶ月おきの演奏会と、益々芸域を広げて日本の笛の可能性をたしかめて着々と笛に対する愛情を深めてゆく姿は驚く程の清らかさで私の胸に伝わってきます。人間性と技術で数多くのジャンルの人達との競演は楽しみでもあります。笛は心、これからも心の笛を吹き続けていってほしいと思ひます。

寶山左衛門

徹の笛

第二回 福原徹演奏会

2004年4月3日(土)午後2時30分
紀尾井ホール

邦楽振興基金助成事業

協賛=(財)新日鐵文化財団
後援=(財)ビクター伝統文化振興財団

本日はお忙しい中、御来場いただきまして誠にありがとうございます。
平成13年10月に初めてのリサイタルを開いてから、2年半の月日が経ちました。この規模の演奏会は私のような者にはとても毎年は出来ませんので、2~3年おき位には何とか…と当初考えておりました。「笛には未知の可能性があると信じています。自分に作曲の才能があるかどうかは判りませんが、新しい笛の音楽を作るためには、まず演奏家自身が作曲し、演奏しなければと考えております。」と初回のプログラムに書いた気持ちは今も変わっておりません。もしそうなら2~3年に一度だけで本当に良いのかという思いが増し、新作連続演奏会を隔月で一年間、ムジカーザという小会場で毎回助演者を一人だけ迎えるというスタイルで続けて参りました。自作ばかり、それも独奏と対談と助演者との二重奏だけという構成ですから、最終回にはお客様は呆れてもうお見えにならないかも知れないと覚悟しておりましたが、有難いことに毎回多くの皆様に御来場賜り、様々な反響を頂戴致しました。その経験の中で2回目のリサイタルの内容が明らかになり、ようやく今日を迎える事となりました。

この会を開くにあたり、助演者、スタッフの皆様の御協力は勿論のこと、寶山左衛門師はじめ多くの方々の暖かいお力添え、お励ましを頂戴致しましたこと、誠にありがたく存じます。

また御支援頂きました邦楽振興基金、新日鐵文化財団、ビクター伝統文化振興財団の各位にも厚く御礼申し上げます。

最後になりましたが今日御来場下さった皆様に、改めて御礼申し上げます。本日はありがとうございました。

今後とも変わらぬ御指導御鞭撻を賜りますよう、お願い申し上げます。

福原 徹

★
福原徹 作曲

Kyrie

キリエ

今藤政貴 [唄] / 福原徹 [笛]

間奏曲 <初演>

福原徹彦 [笛] / 福原徹 [笛]

Dona nobis pacem <初演>

ドナ・ノビス・パーチェム

NHK東京児童合唱団 [合唱] / 福原徹 [笛]

休憩

トキ <初演>

福原徹 [笛]

千年の桜 <初演>

福原徹 [笛] / 小早川修 [詞] / 鶴澤津賀寿 [太神三味線] / 中川俊郎 [ピアノ]

■Kyrie

これは一昨年「創邦21第三回作品演奏会」で発表した曲で、その後昨年1月にNHK-FM「邦楽のひととき」で放送されました。私としては初回のリサイタルの後、最初に作った曲でもあります。初演時のプログラムに書いた言葉を以下に再掲いたします。

「唄と笛による祈りの曲です。基督教信者ではなく、語学に堪能でもない私が、ラテン語の典礼文を本当に理解しているかどうかはわかりません。けれども痛ましいニュースや、嘆かわしい世界情勢、どうしてもこの言葉が頭から離れないのです。」

キリエ エレイソン (主よ 憐れみたまえ)

クリステ エレイソン (キリストよ 憐れみたまえ)

キリエ エレイソン (主よ 憐れみたまえ)

■間奏曲

「Kyrie」と「Dona nobis pacem」は、いわゆるミサ曲の中では最初と最後にあたる部分で、いずれも言葉に重い意味があります。また私の感覚としてもこの二曲をすぐ続けて演奏するには抵抗があり、間にどうしても笛だけの曲——それも二重奏——が欲しいと思い、この曲を作りました。名前は間奏曲としましたが、今回はDona nobis pacemの前奏曲のような気持ちで演奏いたします。

■Dona nobis pacem

「Kyrie」を作った後、その続編を作るかどうか、作るとしたらどのような形にするか——そもそもこのようなテーマを扱うことの是非は——。逡巡の結果、編成は合唱と笛、言葉は ^{アニムス} ^{デイ} Agnus Dei の最後 Dona nobis pacem を選びました。グレゴリオ聖歌の譜面を探し歩いたり、後輩達との練習でいろいろと話し合ったことも私にとって大変良い経



験になりました。世界でも、自分の身の回りでも、多くの人々が共存して生きて行く、という事を考える時、例えば一人ひとり声の違う人々が共に歌う、あるいは素朴な邦楽の笛と洋楽的訓練を積んだ合唱団が一緒に音楽を創るということが、無意味ではないと信じております。年度替わり、また海外公演の直前の忙しい時期に練習を重ねて下さった団員諸君と指導スタッフの皆様にご感謝申し上げます。

ドナ ノビス パーチェム (我らに平和を与えたまえ)

■トキ

昨年10月、日本産のトキが絶滅しました。かなり以前から多くの人々に心配され、大切にされていたのにもかかわらず、です。他の無名の動植物たちは、いったいどれくらい消えているのか… いつの日か人間にその順番が回ってくるのでしょうか。

普段あまり使うことのない、低い調子の篠笛で演奏いたします。

■千年の桜

私が寶先生の腰巾着のようにお供していた頃、桜の時期になるとこの紀尾井ホールの前(その頃はまだホールはありませんでしたが)の土手をずっと一緒に歩いてお花見をしました。先生も私もお酒を嗜まないのを桜を見上げて歩くだけなのですが、何とも言えないゆつたりとした時間を過ごしたように思います。今回春に演奏会を開く事を決めた時、すぐ会場が決まったのも、そのためかも知れません。

私は今まで、よく邦楽に見受けられる四季の風情を謳うような曲をほとんど作ったことがありません。今回は私なりの形で取り組みました。日本の代表、春の代名詞のような「桜」は私も好きで毎年その美しさに酔うのですが、実際に曲を作ろうと思うとあまりにとりどめ

が無いので、樹齢千年の冬の桜を見に行き、桜を見る人間の移り変わりについて調べ——昔の日本では桜と言えばヤマザクラであったこと、桜を植えたり今のようなお花見を催すようになったのは後になってからであること、咲く桜から散る桜に人々の心が移っていったこと——時代に翻弄され続けたのが桜だとも言えます。

編成は普段の仕事ではあまり会うことは無いものの、昨年のムジカーザで共演して戴いたお三方とのコラボレーションです。笛は愛用のもののほか、先年東北地方で出土した8世紀頃の笛の複製、また室町期に作られた能管も用います。謡(声)の部分は、謡曲の一部を用いたほか、西行の和歌を一首用いました。ご参考までに歌詞を記します。

嬉しやさらば舞はんとて あれにまします宮人の
烏帽子を暫しかりに着て すでに拍子を進めけり
花のほかには松ばかり 花のほかには松ばかり
暮れ初めて鐘や響くらん (謡曲「道成寺」より)

春宵一刻 値千金 花に清香 月に陰
げに千金にも 替へじとは 今この時かや
あらあら面白の 地主の花の景色やな 桜の木の間に洩る月の
雪も降る夜嵐の 誘ふ花とつれて 散るや心なるらん (謡曲「田村」より)

願はくは 花のしたにて 春死なん そのきさらぎの 望月の頃
(西行「山家集」より)

昔かな 花も所も月も春 ありし御幸を 花も忘れじ 花も忘れぬ
心や小塩の 山風吹き乱れ 散らせや散らせ 散り迷ふ
木の本ながら 睡めば 桜に結べる 夢か現か 世人定めよ
夢か現か 世人定めよ
寝てか覚めてか 春の夜の月 曙の花にや 残るらん (謡曲「小塩」より)



福原さんからお仕事のお誘いを頂けるというのは、いったいどういうことなのでしょう？ 私なりに色々考えてみました。福原さんは、伝統芸能の世界でオーソドックスに一点の曇りもない活躍をされていて、その仕事の内容で不動の評価を得ておられるにもかかわらず、その評価を与えている人々から見て、同時に全く見当もつかない(訳の分からないというと語弊がありますが)ことを平然とやっ^{あっぱれ}てのける、天晴、本当の意味の芸の達人といえる人です。

今日の状況をつらつら見回してみますと、伝統芸能に秀でた人は、その世界の中だけで自分を深めて行き、精神修行の様々な過程を得て独自の世界観・宇宙観を築き上げていきます。生涯を掛けて同じ曲を演奏し続け、自己を深めて行けば行くほど、同じ曲のそれ以外の解釈の可能性には眼が行かなくなり^います。その人に取ってその宇宙が全てであり、宇宙より外は無^いなのですから、それは当然のことで何も悪くはありません。一方、伝統芸能の世界に居ながらにして、その世界に馴染めずそこからはみ出た、所謂“現代邦楽”と呼ばれる世界に属している人達が居ます。たとえばお箏でジャズ、ロック、前衛

音楽をやってみたりニューエイジの浄瑠璃を作ってみたり等。伝統芸能とこういう人達との其の^ま実大変重要な関係は、そのままハンガリー民謡とバルトークとの関係に当てはめることができます。土臭さを幾分損なった西洋風なピアノ編曲^{アレンジ}を子供の頃に親しんだからこそ、長じてから原典のハンガリー民謡ってどんなのだろうという、素朴な興味が湧いてきたのですから。また、彼らは伝統芸能に属する作品も、敬意を払いつつも独自の視点からアプローチし、深い解釈を示します。しかし、折角のその^{けい}炯眼も一方の伝統芸能に秀でた人の立場から見れば、邪道としか映らないことが多々あります。それは前述の如く、自分の宇宙とは全く別物の宇宙に属しているからです。この二つの、今の所触れ合うことのない別々な宇宙の存在のもどかしさ！ そこで、いよいよなのですが、福原さんがもしかしたらその両方の宇宙の橋渡しのために生まれてきた人だとしたら、どうでしょうか……？ これは、ただ事じゃありません！ そして微力ながらも私が関わらせて頂けたのは、初めからどんな音楽的領域にも所属していなかった私のキャラクター故にと思ひ、人と人との縁に感謝しつつ筆を置きます。



共演者のこと



今藤政貴
いまふじ・まさき / 長唄唄方



福原徹彦
ふくはら・てつひこ / 邦楽囃子笛方



NHK東京児童合唱団



小早川修
こばやかわ・おさむ / 親世流シテ方音楽師



鶴澤津賀寿
つるざわ・つがじゅ / 女流義太夫三味線



中川俊郎
なかがわ・としお / 作曲家・ピアニスト

今藤政貴さんには、一昨年「創邦21」で「Kyrie」を初演した時から唄っていただいています。唄と笛の曲を作ることに決めた時、当初歌詞は芭蕉の俳句や現代詩から採ろうと思っていました。しかし彼の声を意識するにつれ考えが変わり、この曲が生まれました。もちろん政貴さんの高音域の美声が私にそうさせたのですが、彼のお人柄、たたずまいも「Kyrie」にととても相応しく思えるのです。

福原徹彦さんは笛を吹くために生まれてきたような人です。私が笛を始めた頃にはすでにプロレベルの演奏をしていました。同門の尊敬する大先輩なのですが、年齢が近いこともあり、私にとっては何でも相談できる友人でもあります。名前が似ていますが(本名が「徹彦」「徹」です)兄弟でもありませんし、性格も全く違います。でも私は勝手に自分の本物の兄弟のように思っています。

NHK東京児童合唱団は50年を越える歴史を持つ、世界に誇る児童合唱団です、と卒団生である私が言うのは大変おこがましいのですが…。厳しい入団試験、週に何度も通う練習、放送や演奏会で様々な曲をこなす日々。その時に出会った人たちや仲間達が今も、例えばこの演奏会にも力を貸してくれています。今回出演する後輩達はミドル・クラス(小学5年～中学1年)のメンバーです。

小早川修さんは大学の同期生です。彼のお蔭で学生時代にはたくさん(しかも楽しく)能楽に触れる事が出来ました。夜の土野公園で謡を聞かせてもらったり、笑い出したいような思い出も沢山あります。しかし彼は藝に対して非常に真面目な人で、ひたすらまっすぐに研鑽を続けているので、彼の演能を見るたびに私はいつもハッとさせられ、我が身を反省させられるのです。

福原徹

鶴澤津賀寿さんは古典一筋の素晴らしい三味線奏者です。そういう方と新しい試みに取り組みたいと思い、昨年のご新作連続演奏会で無理をお願いしましたが、今回もまた引き込んでしまいました。今回の譜面をお渡しした時も「えーっ!何ですかこれは?」と言いつつ撥を握り直す津賀寿さんは、実のところ、この非常に特異なカルテットの「引き締め役」になって下さっているのかも知れません。

中川俊郎さんと初めてお目に掛かったのは、つい最近の事なのですが、にもかかわらず曲を創っていく過程で、毎晩のように邦楽界の事、現代音楽について、そして過去の大作作曲家への想い……、時間を忘れとうとうと議論を交わしました。彼との、ある種激烈な出会いは、私が、自分の中にある何か殻のようなものを破る大きなきっかけとなりました。今回は、カルテットの他のメンバーも巻き込んで、また一段と濃密な練習時間を過ごしています。

福原 徹

1961年東京生まれ。四世宗家寶山左衛門(六世福原百之助・人間国宝)に師事。83年師より福原徹の名を許される。84年東京芸術大学音楽学部邦楽科を卒業。以降、邦楽囃子笛方として長唄演奏会、舞踊会、また放送、講演、海外公演などで活動を続けるほか、笛を主体とした曲作り、新しい形の演奏会の企画構成等も手掛ける。東京と浜松にて門弟の育成にあたり「百笛会」を主宰。清泉女子大学非常勤講師、静岡県立高校非常勤講師を歴任。NHK文化センター講師。97年笛と様々な邦楽器を用いた自作品集CD「徹」を制作。01年第1回演奏会「徹の笛」を開催、平成13年度文化庁芸術祭大賞(音楽部門)を受賞。02年11月より03年9月まで、新作連続演奏会「徹の笛 in MUSICASA」を隔月で開催。著書に「やさしく学べる笛教本」(汐文社)。

● 福原徹 作品リスト

| 初演年月 | 曲名 | 編成 |
|-----------|---|---------------|
| 1992年 1月 | 三つくし | 篠笛、三味線 |
| 1993年 1月 | 四人の男 | 篠笛×4 |
| 11月 | 一枚の写真 | 篠笛独奏 |
| 1994年 1月 | ふたり | 篠笛×2 |
| | 五人囃子 | 笛、小鼓、大鼓、太鼓 |
| 1995年 1月 | 六歌仙 | 唄、箏、笛 |
| 1997年 3月 | 九条羅生門 | 能管、太鼓 |
| 4月 | 七夕の空 | 篠笛独奏 |
| 5月 | 八月 | 篠笛×2 |
| | 十人十色 | 笛(複数)、囃子 |
| 1998年 11月 | 見送る者、見送られる者 | 笛×3 |
| | 千秋万歳 | 篠笛(複数)、小鼓、大鼓 |
| 2000年 3月 | 残照 | 篠笛独奏 |
| 5月 | 東京能管 | 能管独奏 |
| | 桜の樹の下で | 篠笛×2 |
| 6月 | 白い月 | 篠笛、小鼓 |
| 2001年 5月 | 女と男 | 能管独奏 |
| 10月 | うた | 篠笛独奏 |
| | 長い旅 | 笛×2 |
| | 千の太陽、万の扉 | 笛×3、小鼓×2、大鼓×2 |
| 2002年 6月 | キリエ | 唄、笛 |
| 11月 | 篠笛独奏曲第1番 | 篠笛独奏 |
| | 6枚のレムブラント テイトゥスに捧ぐ | 能管独奏 |
| | 国境を越えて I. 国境線 II. 雲霞の如き III. 廃墟を進む杖 IV. 海峡 V. 最後の楽園 | 笛、ピアノ |
| 2003年 1月 | 篠笛独奏曲第2番 | 篠笛独奏 |
| | 6枚のレムブラント ベテロの否認 | 能管独奏 |
| | 国境を越えて VI. "I am." | 笛×2 |
| 3月 | 篠笛独奏曲第3番 | 篠笛独奏 |
| | 6枚のレムブラント イサクとリベカ | 能管独奏 |
| | 国境を越えて VII. 人間愁ひの花盛り VIII. 春の夜の波より明けて | 謡、笛 |
| 5月 | 篠笛独奏曲第4番 | 篠笛独奏 |
| | 6枚のレムブラント 最後の自画像 | 能管独奏 |
| | 国境を越えて IX. WAR X. この水を飲んで下さい | 笛、小鼓、大鼓 |
| | 相聞歌 | 唄×2、笛 |
| 7月 | 篠笛独奏曲第5番 | 篠笛独奏 |
| | 6枚のレムブラント 赤いテーブル | 能管独奏 |
| | 国境を越えて XI. 接触 XII. 始まり | 笛、太鼓、三味線 |
| 9月 | 篠笛独奏曲第6番 | 篠笛独奏 |
| | 6枚のレムブラント 夜警 | 能管独奏 |
| | 国境を越えて XIII. 無題 XIV. ダンス・ダンス・ダンス | 笛、ピアノ |

制作 (有)古典空間
舞台監督 清野正嗣
協力 富宿菊生
福原賢太郎
デザイン 大平デザイン事務所
写真 山之上雅信
Na'Ga

Special thanks to

Horai Taizo
Tanaka Bincho
Ohashi Ayako
Kobayashi Kaoru
Hashidate Kenji
Omata Masako
Furuhashi Fujio
Miyahara Asako
Kusunose Sugako
Okumura Michiyo

主催 福原徹